

〈小学校 生活科〉

豊かな体験を通して生き生きと活動する児童の育成

— 一人一人の思いや願いを生かした生活科授業の創造 —

与那原町立与那原東小学校教諭 宮 城 利恵子

目 次

I	テーマ設定の理由	11
II	研究仮説	11
III	研究の全体構想図	12
IV	研究内容	13
1	生活科で考える「豊かな体験」	13
2	「生き生きと活動する児童」	14
3	一人一人の思いや願いを生かす学習活動の工夫	15
(1)	思いや願いを見取る工夫	15
(2)	単元構想の工夫	15
(3)	学習形態の工夫	16
(4)	家庭・地域との連携、異学年交流学习の推進	16
4	活動意欲を高める評価・支援のあり方	17
V	授業実践	18
1	単元名	18
2	単元設定の理由	18
3	指導目標	18
4	単元の構想	18
5	活動の流れ	19
(1)	主 題 名	20
(2)	本時のねらい	20
(3)	授業の仮説	20
(4)	展 開	20
(5)	一人一人の思い→支援→新たな気づき	20
6	本時の学習指導	20
7	授業の考察	21
(1)	授業仮説①についての考察	21
(2)	授業仮説②についての考察	21
VI	研究の成果と今後の課題	22
1	成 果	22
2	今後の課題	22

豊かな体験を通して生き生きと活動する児童の育成

— 一人一人の思いや願いを生かした生活科授業の創造 —

与那原町立与那原東小学校教諭 宮 城 利恵子

I テーマ設定の理由

社会の変化に対応して、心豊かに、主体的、創造的に生きていくことのできる資質や能力の育成を目指す学校教育においては、児童の思いや願い、これまでの経験や学んだことを基にした主体的な学習活動が望まれている。それを受けて各教科等の指導にあたっては、児童の興味・関心を生かした体験的な学習の重視がうたわれている。それは児童一人一人の思いや願い、体験や経験を通して自立の基礎を養うことを究極目標とする生活科そのもののねらいとも重なるものである。

現代の子供たちの生活は、物質的豊かさがもたらすさまざまな問題が取り沙汰されてきている。自然や生活、社会体験の不足、人間的なかわりの希薄化、社会性の不足など、子供たちの生活は直接体験をしなくともテレビやビデオ、ファミコンによる疑似体験で満足できる世界になってきた。ところが疑似体験は、「……したつもり」のものであくまでも間接体験であり、実生活とかけ離れたイメージだけの世界に外ならない。具体的な活動を通して思考するこの期の児童の自立の基礎にするにはあまりにも、もろいものになりはしないだろうか。そんな中であって自然や社会に目を向けた直接体験的な学習はますます重要視される必要があり、生活科の果たす役割も大きくなってきた。

これまで、生活科の授業にあたっては努めて児童の主体的活動を促すことを最優先させ、教材も児童の身近な環境からとりあげてきた。その結果一連の活動や経験を通して生き生きと、楽しく学習活動に取り組む児童の姿を目にし、「体験活動」は生活科の学習そのものだ実感した。しかし、年間を通した地域素材の教材化不足により、主体的な学習活動が継続できなかったことや一人一人の思いや願いを十分把握できなかったことなど、多くの課題を残したことも否めない。また、児童理解の不十分さ、それによる効果的な支援不足なども反省点の一つにあげられる。

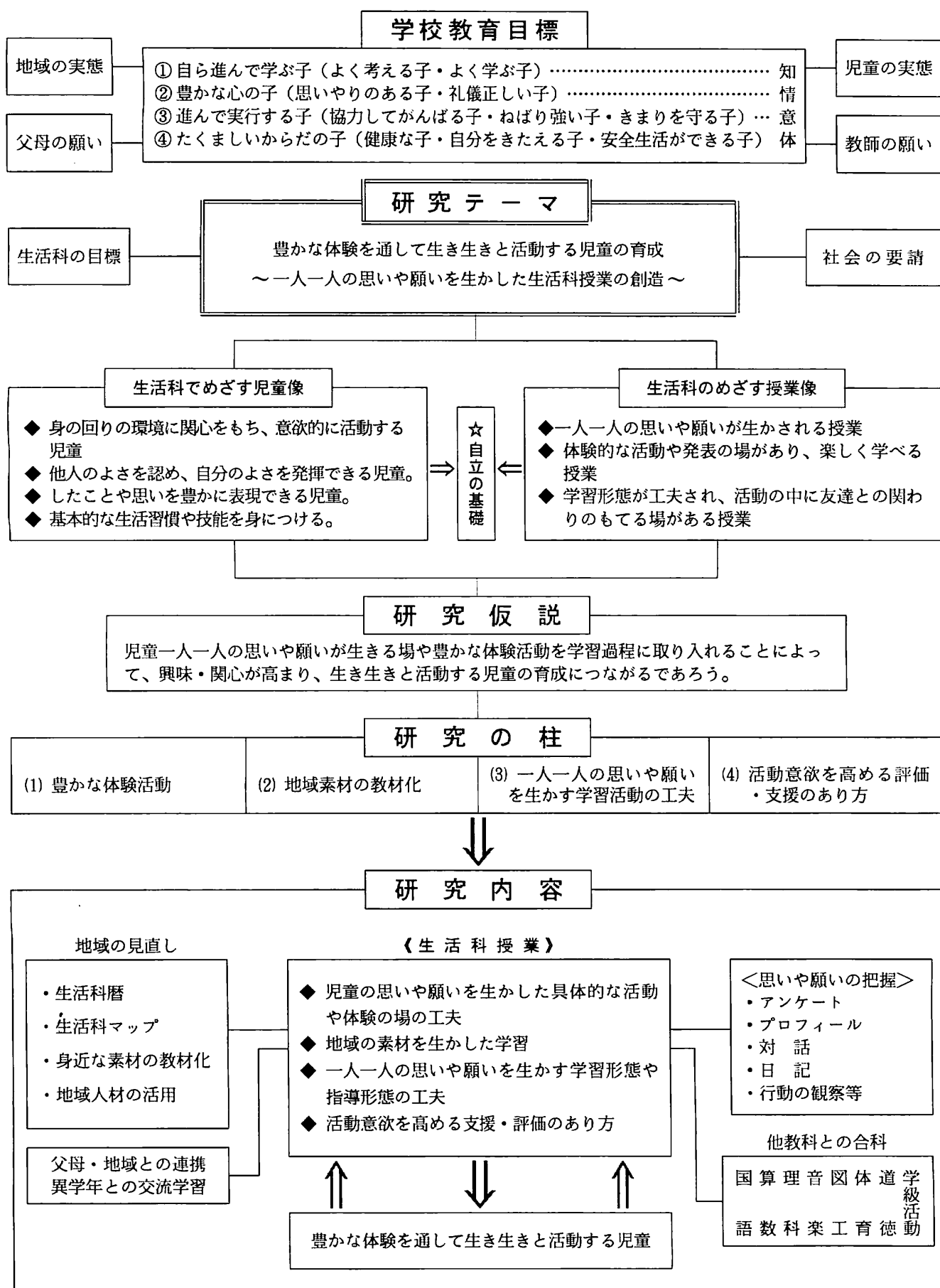
生活科において生き生きと活動する児童を育成するためにはまず、教材との出会いを工夫することだと考える。児童一人一人の興味・関心を共感的に受け止め、豊かな魅力ある体験活動の場を作ることが大事である。次に、その思いや願いを最大限に生かした体験活動によって、学習が展開されていくことが望まれる。それは、自分の思いや願いが実現されていく過程で、児童の生き生きと活動する姿を見ることができるからである。一人一人の思いや願いを生かすという点では、積極的な児童理解が不可欠である。その際、実態調査はもちろんのこと、日ごろの児童のつぶやきなどにも常に耳をかたむけ児童の多様性に柔軟に対応することも大切である。さらに児童の主体的活動が促されるような教師の効果的な支援、また、それが連続・発展していくよう環境構成、家庭や地域との連携も重要となってくる。

以上のことから、児童の感性や創造力を揺さぶる豊かな体験を基盤に一人一人の思いや願いを生かした学習活動を展開することにより、生き生きと活動する児童の育成につながるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

児童一人一人の思いや願いが生きる場や豊かな体験活動を学習過程に取り入れることによって、興味関心が高まり、生き生きと活動する児童の育成につながるであろう。

Ⅲ 研究全体構想図



IV 研究内容

1 生活科で考える「豊かな体験」

物質的に豊かな現代社会の子供たちは、実生活において直接的な体験から離れる傾向にあり今改めて「為すことによって学ぶ」体験学習の重要性が叫ばれてきている。特に低学年児童には、具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴が見られ、生活科においても探求心や感性を揺さぶる豊かな感動体験を基盤にした活動が求められている。

本研究では、生活科の内容「自分と社会（人々・物）とのかかわり」「自分と自然とのかかわり」「自分自身」という基本的な視点をふまえながらつぎの3つの体験を「豊かな体験」ととらえた。

(1) 情緒を揺さぶり、五感を通して体全体で学ぶことのできる体験

児童が社会や自然とかわりながら活動に没頭する中で「楽しさ」「喜び」「悲しさ」「驚き」「面白さ」など情緒を揺さぶり、感動体験をより多く積ませていきたい。五感をフルに使い地域や自然と思う存分かかわり、遊びを通して一人一人のよさを十分発揮させるようにする。このような五感を通して得た感動体験は児童に満足感、成就感を与え次の活動をうみ出すきっかけになるであろうし、そこで培った知恵は生きた力となって働いていくものだろう。

ところで、このような体験は生活科において、自然や社会、そこで接する人々を相手に繰り広げられる。生活科は、その活動の舞台を自分たちの身近な地域におくことから、本研究ではまず、地域素材の教材化を研究のスタートとすることにした。

① 地域素材の教材化

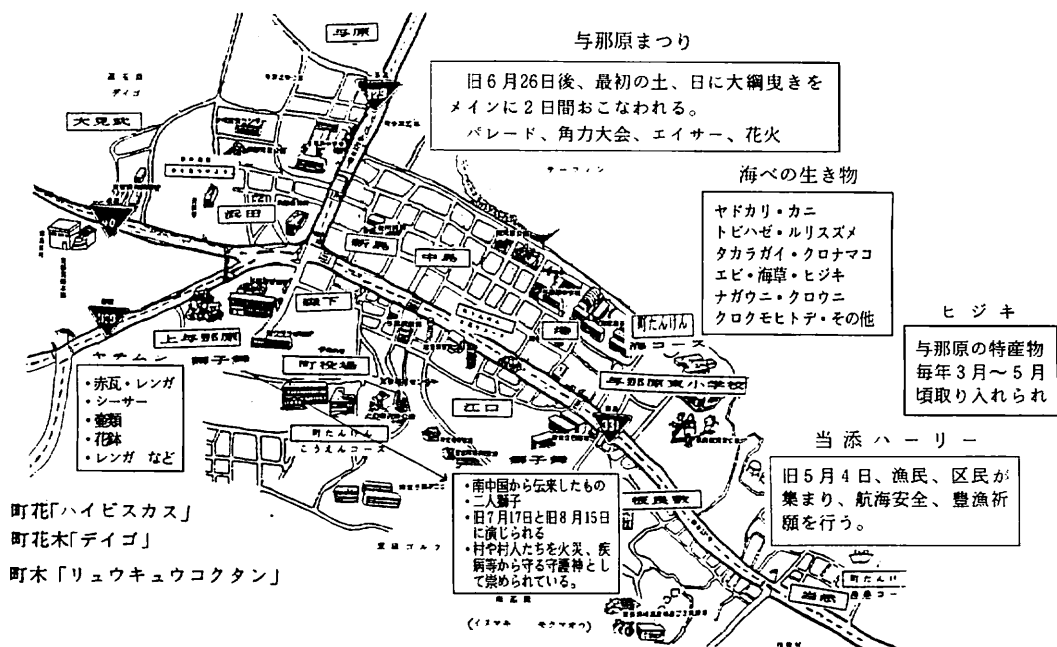
自分の住んでいる身近な地域で直接体験学習を行うことは、児童の興味・関心を高め意欲的な活動を促すことにつながるものである。また生活科で学習したことをただそれだけで終わらせる事なく、生活のなかで生かしていくことができるようにするためにも地域とのかかわりを大切にしていきたい。また、身近な地域のよさに気づくことによって地域への愛着を深めていくことだろう。さらに、このような体験活動は児童の生活をより豊かなものにする原動力になるであろうし、生き生きと活動する児童の育成にもつながるものだと考える。

これらのことに留意し、「生活マップ」、「生活暦」を作成することによって地域素材の開発に努めた。

《生活科マップ》

生活科マップについては、学校周辺の学習環境の見直しを図り活動内容と児童の行動に広がりをもたせる様にした。さらに、春夏編と秋冬編に分け、素材や教材内容を付記し学習をイメージしやすいように配慮した。

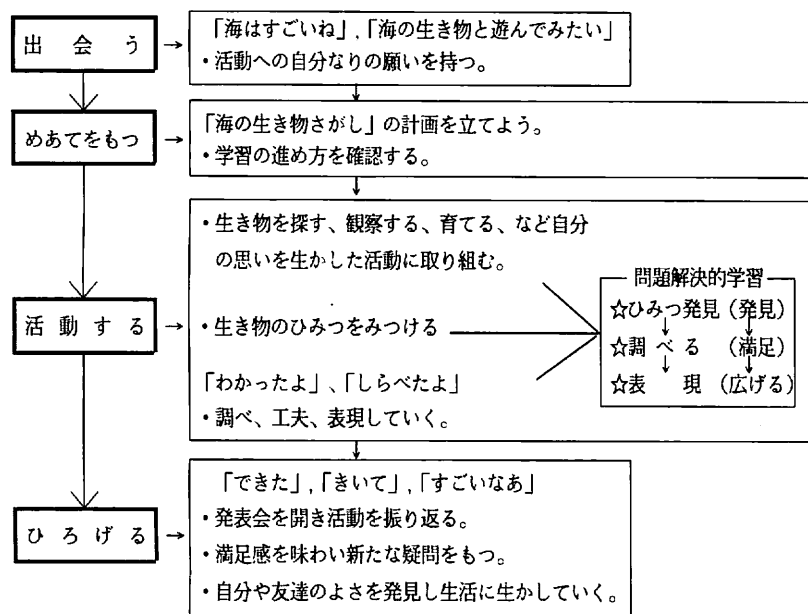
図1 生活科マップ 春夏編



(2) 学び方の基礎となる問題解決的な体験

生活科では、社会や自然と多様にかかわる中から生まれたその子なりのこだわりを自分の問題として解決していく体験をより多く積ませていきたい。このような問題解決の過程で培われる「見つける」「めあてをもつ」「活動する」「ひろげる」などは、生涯にわたって学び続けるための基礎となる学び方体験だからである。

表2 海への生き物“ひみつ大はっけん”問題解決的な体験



教室の窓越しに毎日目にしている海。子供たちのふだんの会話の中からも「海」に関する話題を時々耳にする。校歌の中にもうたわれ、また町の歴史を語る時そこにはいつも「海」がある。今回子供たちは身近な「海」に積極的に働きかけながらそこに潜む不思議さやすばらしさに心をときめかせた。本研究では問題解決的体験を「海の生き物」を対象に自ら課題を見つけ、解決していく活動を通して実践した。

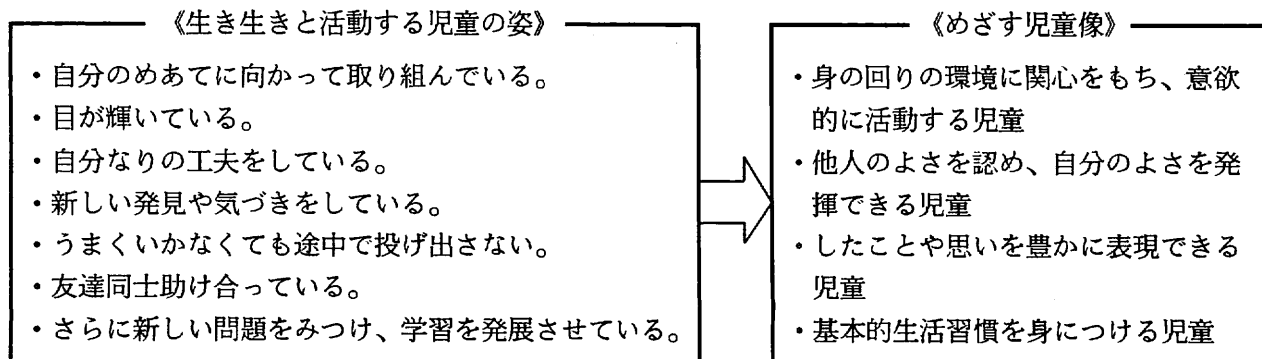
さらに、「活動する」過程においては生き物のひみつを（発見する）→（調べる）→（表現する）という問題解決的学習を取り入れ、より主体的に取り組ませるよう配慮した。

(3) 自分の気づき、発見を再構成する表現的な体験

具体的な活動や体験を通して生まれたその子なりの思いや気づきは、多様な表現活動によってさらに深められていくものである。表現活動のなかでは常に活動の振り返りがなされ、そのなかで、子供たちは自分の活動を見直し、成就感を味わうことができる。また、事象との触れ合いの中で生じた感動を表現していく過程において、事象を見る目、感じる心、追究する態度、表現していく力も培われていくものである。このような活動を通して、より主体的な活動が展開され、次の活動への意欲づけもその過程で生まれてくることだろう。生活科においては作文、絵、動作化など様々な表現活動を取り入れ、対象との対話、自分自身との対話を十分行わせたい。

2 生き生きと活動する児童

子供たちの毎日は《ひと・もの・こと》との出会い、触れ合いを通して感動体験を味わい充実したものになっていく。そんな中で心、体、頭のすべてをかたむけ夢中になって活動する子供たちの姿は生き生きと輝いており本来の生きた子供たちの姿を見ることができる。特に生活科においては子供一人一人が生き生きと体全体で学び、共に生きていく知恵を身に付ける授業が求められている。本研究では児童の生き生きと活動する姿を次のようにとらえめざす児童像へとせまった。



3 一人一人の思いや願いを生かす学習活動の工夫

(1) 思いや願いを見取る工夫

児童一人一人が自分の思いや願いをもちその実現に向けて生き生きと活動するためには、教師が積極的にそのよさや可能性を見つけて行くことが大切である。活動過程で発する児童の発言やつぶやき、変容を大事に見取り共感的な児童理解に努めたい。

本研究では以下のような事を通して一人一人の思いや願い、行動を見取り児童理解に努めた。

表3 S子の変容

《ぼくのわたしのプロフィール》
学年スタートと同時に父母の協力を得て作成。その子のよさ、得意なこと、父母の願いを早めに見取り、学校生活全般で生かしていけるようにする。学期ごとに一人一人の変容を父母に知らせ、成長を認める資料として有効に活用したい。

また体験については特に生活化の目標を受けて項目を作成した。

《アンケート・実態調査》

一人一人の思いや願いが生きる体験活動を学習過程に効果的に取り入れるためには単元前のアンケート調査を行い児童の実態を把握しておく必要がある。それを考察し、教材分析を行い単元構想にいかせるようにする。

《児童記録》

児童のつぶやき、行動、変容を生活科以外の場面でも目を向けできる限りメモしていく。

以上のような事を通して単元終了後児童の変容をまとめたのが「表3 S子の変容」である。

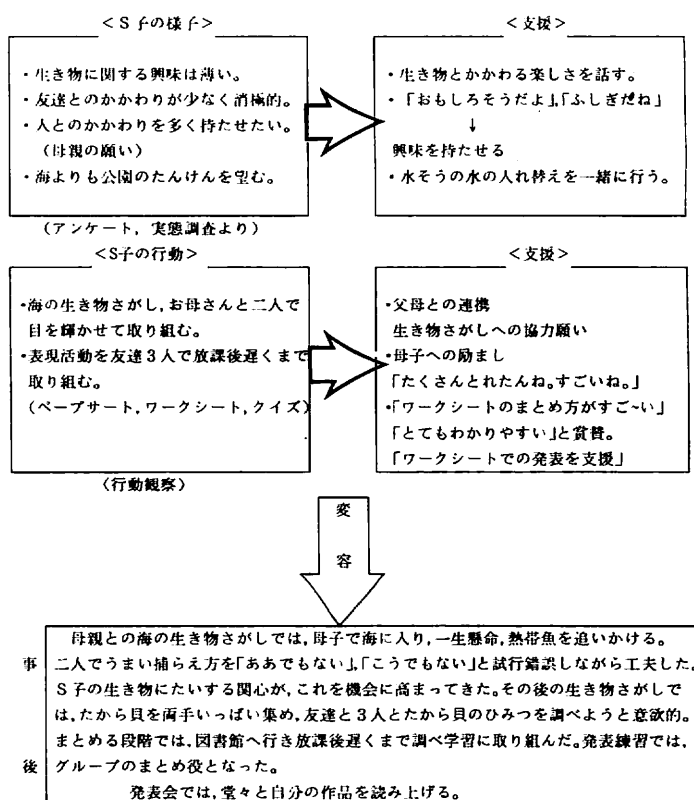
(2) 単元構想の工夫

生活科の授業の出発点は「やってみたい」、「ためしてみたい」という気持ちであり、「どうしてだろう」、「ああ、こんなこともわかった」という意識の高まりである。そうした子どもの思いや願いを最大限に生かしつつ児童の実態にも柔軟に対応しながら単元を構成していくことが大切である。

本単元では、まず前単元での児童のつぶやきからきっかけをつかみ、児童へのアンケート、実態調査などを参考にして活動の導入を工夫した。また、一人一人の願いを把握しつつ子供たちの意識の流れに沿うよう活動を計画し、子供の声や姿をイメージしやすい構想図になるよう配慮した。

子供たちが生き生きと活動を行うためには、豊かな体験、価値ある活動体験を保障することが必要であり、こうした活動の中で児童一人一人のよさが発揮されていくものと考えている。本単元では「豊かな体験」をうけ、次のような「体験」を価値ある体験とし、単元構成をした。

- ア 「自然とふれあう楽しさ」体験
- イ 「飼育方法の追求」体験
- ウ 「生命の大切さにふれる感動」体験
- エ 「招待した人とのふれあい」体験



※本時の指導案「海への生き物“ひみつ大はっけん”」単元構想参照。

(3) 学習形態の工夫

生活科の指導は他教科と深く関連させることによってより効果的に展開されていく。学習指導においても活動の連続性や学習内容の関連を図りながら合科的な指導を推進することが大切である。

《合科的指導の意図》

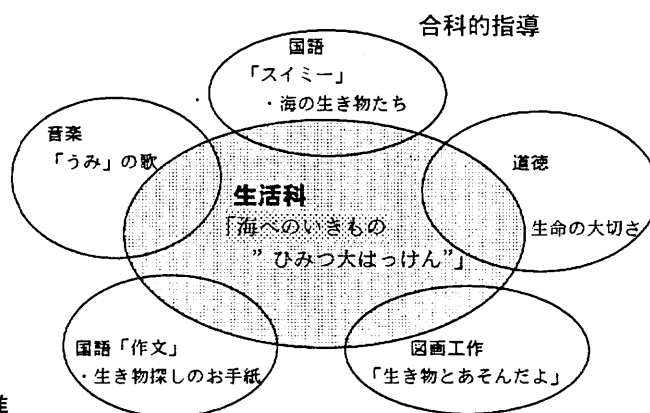
☆ 生活科における活動や体験が他の教科に広がり、それらの学習の充実に役立つ。

☆ 他教科の学習の成果を生活科の学習の活動の中で生かし、生活科の学習の効果を上げる。

☆ 生活科の学習がより充実すると共に、他教科の目標も達成され授業時数の効果的活用が図られる。

今回「海への生き物ひみつ大はっけん」においては右のような合科的指導を行った。

図2 「海へのいきもの“ひみつ大はっけん”」



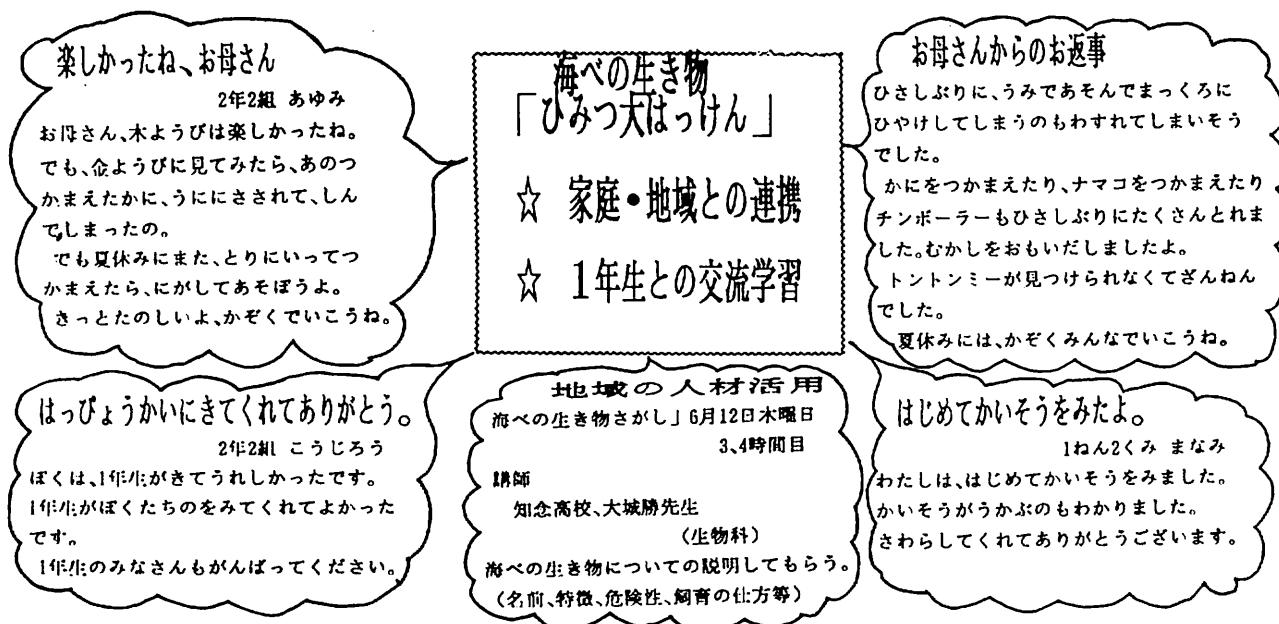
(4) 家庭・地域との連携、異学年交流学习の推進

学校週5日制の完全実施をひかえこれからの教育は、家庭や地域との連携を図っていくことが重要になってくる。子供の生活の場である家庭や地域でより多くの体験を積ませていくことが子供の興味・関心を高め、「自立の基礎」が培われていくものとする。

人間関係が希薄化する現代社会においては「自分と身近な社会や自然との関心を持たせる」ことが重要になってくる。そこで本単元においても子供とのかかわる様々な人々をよき支援者と考え家庭・地域との連携を密にしながら進めてきた。

学校と家庭、地域とが一体となって支援することによって子供たちの多様な願いや活動により効果的に対応していけるものである。またいろいろな人とのかかわりをもちながら行う体験はより深く実りあるものになり子供たちにとっていつまでも心に残ることだろう。今回お母さん方は、自分が子供の頃海で遊んだ思い出を語りながら子供達との生き物さがしを楽しみ、子供達はそこの感動をその後素直に手紙に書き綴った。また1年生と思いを共有しあいながら発表会を行うことによってお互いのよさにも気づき楽しく活動できた。さらに地域の人材を活用することにより子供たちの活動にも広がりがもて、気づきもたくさん生まれた。

図3 海へのいきもの“ひみつ大はっけん” 家庭・地域との連携交流学习



4 活動意欲を高める評価・支援のあり方

生活科の評価の特色として、以下の3点があげられている。

- (ア) 具体的な活動や体験の広がりや深まりを評価する。
- (イ) 一人一人の児童に即してその子なりの意欲や興味・関心、気付きや行動がどのように発揮されているかを評価する。
- (ウ) 実践的な態度の評価を重視する。

それらは、一人一人の活動を具体的に支援していくためのもの、次の活動への意欲を高めるためのものでありたい。

評価の場面を三つの場面に分けるとまず、何に関心があるかという出会いの場面での評価。次に、どのような思いで活動に取り組んでいるかという活動過程での評価。さらに、それを次の活動へと広げていく場面での評価がある。また生活科は、日常生活での実践的な態度をもとに評価し次の指導に生かすという特質もあり、一時間一単元という短時間の評価でなく、長期間にわたってその変容をとることが求められている。

以上、生活科の評価の特質を踏まえ児童が生き生きと主体的に活動するために、一人一人の思いや願いを具体的な活動や体験の広がりや深まりから見取り、さらにその評価を絶えず次の活動や指導に生かしていく評価と指導の一体化を図っていくことにした。

表4 評価と指導の一体化「海への生き物ひみつ大はっけん」

課題	児童の様子	評価見取り	支援
出会う	<5月 海たんけん>前単元  「海のおいしさよー。」 「すごい、いろいろなかある。」 「海には、楽しいものかいっぱいだあ。」 「こんどは生き物さかしをしよう。」	・海への興味関心が高い。 ・生き物への親しみが強い。 ・海へ行く機会が少ない。(アンケート)	・子供が自分の思いをもてる支援 ・「～したいね。」という願いを共感的に受け止め、教材との出会いの場を工夫する。 ・「海の生き物」単元設定
活動する	<海の生き物さがし>  「たくさん生き物を見つけたよ。」 「海の生き物を探したいねえ。」 「もっともっと生き物さがしをしたい。」 「先生、これなんというの？」 「お母さんもチンボウと名のじょうずだよ。」 <生き物のひみつ大はっけん>  「魚さん、死んじゃったね。」 「おへやかせまかったからだよ。」 「水がきたなかったからだよ。」 「魚は海の方がいいんだよ。」  「海の生き物には、ふしぎなことがいっぱいだね。」 「1年生にもひみつをおしえてあげよう。」	・海の生き物を飼いたいという願い。 ・生き物さがしの時間が足りない。 ・生き物に対する関心はあるが知識が弱い。 ・生き物さがしのことを家族へ伝えている。 ・生き物の死を悲しむ姿。 ・海の生き物の飼育の工夫に気づく。 ・不思議に思っていることを調べようとする。 ・だれかに伝えたいという意欲が高まっている。	・活動に没頭できるよう支援 ・活動の場の設定(用具の準備、環境の整理)。 ・活動する時間を保障する(3回の探検へ)。 ・地域人材の活用を図り、海の生き物への知識を高める。 ・父母との連携を図り、共に活動することで、より意欲的に取り組ませる。 ・弱っている生き物を海へ返す。 ・死んだ生き物のお墓を作り、弔わせる。 ・生き物への興味・関心を高め、知識を深めるための調べ学習を援助する。 ・発表会は1年生を招待することに知らせる。(1年担任との連携)
ひろげる	<ひみつ大はっけん発表会>  「いろいろなひみつがわかったよ。」 「1年生もよろこんでいたからうれしかったよ。」 「みんなの発表、じょうずだったね。」 「夏休みは、家族で海の生き物さかしをしたいな。」	・友達のように気づいている。 ・成就感、満足感を味わっている。 ・次への意欲の高まっている。	・自分の思いを達成したり、新たな気付きをもつよう支援する。 ・これまでの活動の記録を用意し、振り返る場の設定をする。 ・自分のよさや友達のように気づき、生活へ生かせるよう支援する。

<単元を終えて>

「海の生き物をかいたい」という児童の願いからスタートした本単元であるが活動過程では様々なハプニングがあり、スムーズに展開されないこともあった。対象が自然の海、そこで生きている生き物たちであったためであろう。

しかし、その都度児童のつぶやきや反応を共感的に受け止め、出来る限りそれらがかなえられるように柔軟に対応してきた。海での生き物さがしの場面では親子で知恵をしばり、試行錯誤しながら生き物を探している姿。1年生にひみつを教えるんだと意欲的に表現活動に取り組む姿。いずれも生き生きと主体的に活動する児童の様子を目にすることができた。

自分の思いや願いがかなえられていく過程で見せる児童一人一人の表情は、きらきら輝き充実感、満足感に満ちたものだった。と同時に児童の反応を見取り、評価し、つぎの指導に生かすことの重要性を改めて痛感させられた。

飼育観察の途中、生き物の死を目のあたりにし悲しんだ子供たち。「海の生きものはやっぱり海がいいよね。」とつぶやきながら元の海に返した。その姿からは生き物の生命を大事にする心がひしひしと伝わってきた。

V 授業実践

1 単元名 海への生き物 “ひみつ大はっけん”

2 単元設定の理由

- (1) 教材観（省略）
- (2) 指導観（省略）
- (3) 児童観

生き物の大好きな子供達である。観察池でカエルのたまごを見つけ教室の水槽の中で大事に育てたり、雨上がりの教材園や花壇でカタツムリを見つけいっしょに遊んだり。身近な生き物に対する児童の興味・関心は高い。

「町たんけんをしよう。」のあと実施したアンケートによると、海のたんけんは、ほとんどの子が楽しかったと答えているが、身近にある海に行く機会が少ないことが現状として見えた。また、「海たんけん」のときの児童のつぶやき「海ってすごーい」「海の生き物とちょっとあそびたい」「生き物のかってみたい」から海の生き物に寄せる児童の強い思いや願いが伝わってくる。

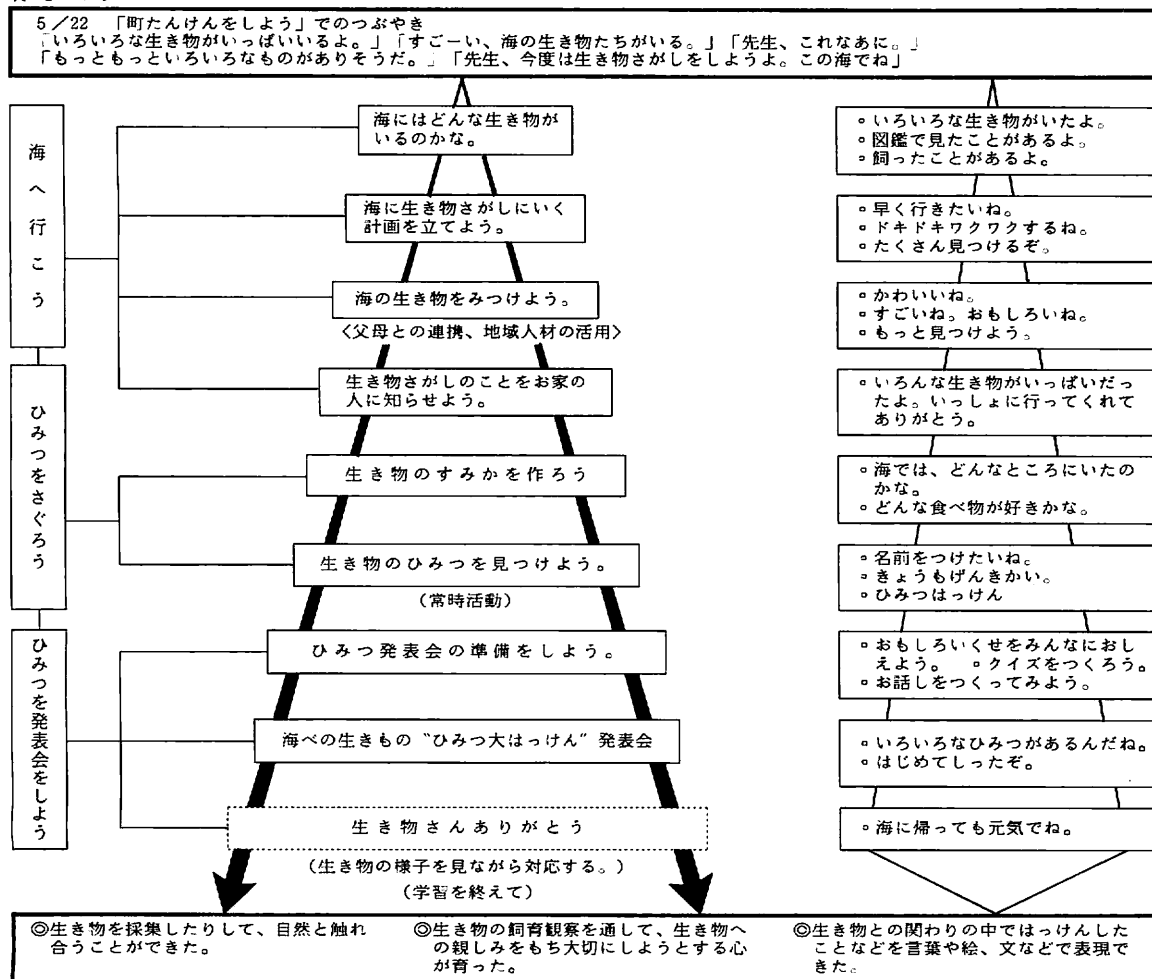
それらのことを念頭にこの単元では、児童一人一人の思いを生かした学習活動の工夫を図り、一連の活動過程での発見や気づきにも柔軟に対応しながら進めていきたい。

3 指導目標

- (1) 総括目標（省略）
- (2) 観点別目標（省略）

4 単元の構想

☆ きっかけ



☆ つなぎ

- ・「また、生き物さがしをしていっしょに遊びたいね。」→「秋に虫とあそぼう」の単元へ。
- ・「ほかにも楽しい所はないかな」夏休み、与那原祭り→「東っ子まつりをしよう。」の単元へ。

時 学習活動

(1) 海へにはどんな生き物がいるかな

- 「町たんけん」で海の生き物と遊んだことを思い出して話し合う。



(2) 海へに生き物をさがしに行く計画を立てよう

- 生き物のいる場所について話し合う。
- 安全の約束、準備について話し合う。

(3) 海への生き物を見つけよう



- 知念高校の大城勝先生の説明を受ける。
- 安全の約束を守り、工夫しながら生き物を捕まえる。



- ウニは石のあなにくっいているんだね。
- チンボラーもたくさんいるね。
- 小さいカニがたくさんいる、いる。



- 先生、水にとびこんでもいい?
- さかなはにげるのがすばやくてつかまえられるよ。

(5) 生き物さがしのことを家の人にも知らせよう

海のいきもののたくさんのかみ

かぞくたちへ

おかあさん おとうさん 海にはいろいろないきものがいます。

なまこは、ふいておれないうちで、たべられちゃう。

みるつるつるして、きれいで、たべられちゃう。

かみかみして、たべられちゃう。

なまこ、さかすかに、たべられちゃう。

は、「町たんけん」のときより、たくさんさがしました。

いたよ、とてましたのかたよ。

家の人からのおへんじ

(小さいころの、海での思い出などを語ってあげると
よろこぶと思います。)

(6) 生き物のすみかを作ろう

- 生き物をつかまえた場所を思い出しながらすみかを作る。



- 海の水じゃないといけないよね。
- 波の音もあるといいね。
- 石も入れてかくれ場所もつくらうね。
- 「スイミー」みたいだね。

(7) 生き物のひみつを見つけよう

(8) 気づいたことを発見カードに絵や文でかく。

- 家の人にもひみつを教えてあげよう。
- 生き物も見せてあげたいね。
- 1年生にも生き物のことしらせたいね。
- いろいろなひみつがあるから、びっくりするね、きっと。



(9) 「ひみつ大はっけん」のじゅんぴをしよう

(10) 「ふしぎだな」「なぜだろう」と思ったことは図鑑で調べる。



- ナマコじてんを作ろう。
- おおがた絵本もいいね。
- クイズも作ろう。

(10) 海への生き物「ひみつ大はっけん」発表会

- それぞれの思い、願いを生かし表現活動を楽しむ。



〈クイズ、紙芝居、ペープサート、図鑑、OHP、お手紙〉

7 授業実践の考察

(1) 授業仮説①についての考察

発表会は、児童の「1年生におしえてあげよう」の声から1年生との交流学习を行うことを決定。以後児童の活動はより意欲的になった。1年生にひみつをおしえてあげるという目的意識をもったためであろう。表現活動は相手意識を持つことにより、その課題に一層主体的に関わっていくことが子供たちの姿からうかがえた。また、表現していく過程においては、図鑑を調べたり実物を詳しく観察するなどして、事象を見る目の深まりや思考の広がりも見られた。さらに、「ふしぎだな」と思ったことは、1年生にちゃんとせつめいできるようにと、お互いに意見を交わし合い試行錯誤を繰り返しながらまとめていった。発表会では友達の発表を聞いたり、1年生とのクイズのやりとりを通して新たな気づきが生まれ、一人の児童の発見が他の児童にも共有され全体として広がっていく様子が伝わってきた。また、「つぎは、ほかの生き物についてもしらべてみたい。」「こんどは図鑑にまとめたい。」などというつぶやきも聞こえ、1年生に自分たちの発表をつたえたことにより自信をもつようになり、交流学习は次の学習への意欲づけにつながるということがわかった。

図4 自己評価カード

7月10日 木

海べのいきもの ひみつ大はっけん 名前 きたよし かすみ

1 お友だちのまえて、じょうずにはーびょうできましたか。

よくできた できた あまりでなかった

2 お友だちのはーびょうをよくきくことができましたか。

よくできた できた あまりでなかった

3 お友だちのはーびょうをきいて、海の生きものについて新しくわかったことがあったら書いてください。

●うにのはりはとがっているけど、さわってみるととても気もちよくて、せんせんいたくなかったです。

●たから貝は、むかしお金とつかわれていたりおまもりにつかわれていたのがわかりました。

(ウナギ) (タカラガイ) (カメ)



《海べのいきもの“ひみつ大はっけん発表会”》

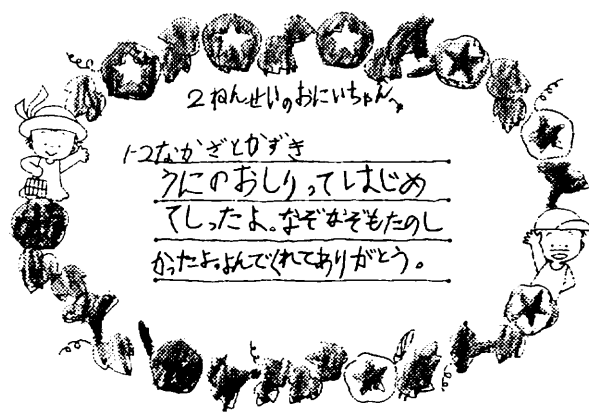


図5 1年生から2年生へのお礼の手紙

(2) 授業仮説②についての考察

表現活動では教師が一方的に押しつけることなく、子供たちのイメージと言葉によってまとめていくことを最優先させた。その結果子供たちは、一人一人の思いや願いを生かしペープサート、大型絵本、紙芝居、TPシート、さらに具体物を使っでの表現活動も見られ自分たちなりに工夫しながら生き生きと表現活動に取り組んだ。発表の場面では、グループで役割分担をし、それぞれのよさを発揮しながら主体的に取り組む姿をみることができた。自分なりの思いや願いを持ち、生き物と関わっていくことを通して様々な気づきをもつようになり、生き物をより身近なものとして親しみを持って接していくことがわかった。



「生き物さんありがとう。」「海のいきものはやっぱり海がいいよね。」と、
もとの場所に生き物を返す子供たち

VI 研究の成果と今後の課題

1 成 果

- (1) 一人一人の子供の思いや願いを生し、五感をフルに活用した体験活動を通して児童はより主体的に生き生きと学習するようになった。
- (2) 子供たちの興味・関心の高かった「海」を教材に取り上げ、自然と思う存分かわることにより生き生きと情緒豊かに学習に取り組んだ。
- (3) 活動過程における児童の様子を見取り、支援に生かすことができた。（評価と指導の一体化）
- (4) 直接体験を通して気づいたこと、発見したことを表現活動に生かすことができるようになってきた。
- (5) 家庭や地域との連携、地域の人材活用、異学年交流学习を行うことにより、活動の幅も広がり、より創造的に心豊かに取り組めるようになった。

2 課 題

- (1) 子供の願いや思いを生かした活動を保障する学習環境の整備、場の設定等の工夫を図りたい。
- (2) 体験活動を取り入れた教材開発の見直しを重ねていく。
- (3) 体験的な学習は時間的な負担が大きいため、活動内容の精選や効果的な合科的指導を図る必要がある。
- (4) 基礎・基本を重視した十分な教材分析を行い、指導内容のポイントをとらえた指導計画を立てていきたい。

<主な参考文献>

文部省小学校課編集	『初等教育資料』	東洋館出版	1996年
文部省	『生活科の学習指導の創造』	東洋館出版	1993年
飯田稔編	『豊かな体験を育てる小学校の学級経営』	明治図書	1992年
筑波大学付属小学校初等教育研究会	『教育研究』	不昧堂出版	1997年